

(1. 書評論文)

1-2. 進歩なき時代の未来のリアリティと貧困

——現代日本における「小さな未来への強迫」と「未来なき者」を通じて——

若林幹夫『未来の社会学』

(河出書房、2014年)

加藤 仁彦

1 はじめに

2016年8月、「貧困JK（女子高生）」という言葉が耳目を集めた。発端は、2016年8月18日のNHK「ニュース7」にて紹介された、貧困だと自称する女子高生の暮らしぶりにある。彼女は番組で、自身の生活の困窮具合と、経済的な理由により専門学校への進学を諦めざるをえなかったという現状を説明する。しかし、彼女の語る貧困と、カメラに映し出されたものとの整合性がとれないことなどを理由として、捏造された貧困ではないのか等の非難がネット上で繰り返られることになった。自称貧困である彼女の身の回りに、高額な物（例えば数万円もする画材や、アニメのグッズ）が並んでいたこともあり、子どもの貧困を報道するというNHKの当初の思惑は失敗したといえるであろう。だが、彼女が本当に貧困なのかという点は別として¹⁾、貧困を伝えるという点では成功したともいえる。つまり、番組の放送後、「貧困とは何か」という議論が様々な立場の人から展開されることになったからである。

上記の女子高生のように、貧困が論じられる際には、今現在の困窮状態だけではなく、未来の可能性を断念せざるをえない事態²⁾についても同様に問題となってくる。貧困研究において、未来という視点が存在しないわけではない。古くはオスカー・ルイスが『貧困の文化』において、メキシコの貧困層の人々は未来を見据えて生活するのではなく、現在のよろこびに重点を置く生活スタイルを有することを論じた。人々にとって将来の成功はあまりにも非現実的なので、現在のよろこびに重きが置かれるのだが、そのことが貧困の再生産に繋がっているのであると。また、ピエール・ブルデューは『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』で、アルジェリアの下層階級の民衆がなぜ下層階級であり続けているのか、という点について論じている。そこでブルデューは、彼らは想像上の未来の目標点にむかって、現在のあらゆる

1) 貧困が捏造されたものであろうとなかろうと、議論を生じさせたことに違いはない。また、捏造された貧困か否かという議論は、誰が正統な救いの対象者であるのかという議論でもあり、この論争は中世から現代に至るまで延々と繰り返されてきたと、フランスの歴史社会学者ロベール・カステルも指摘している (Castel 1995=2012)。

2) 「個人はその現在の事態のみを見るものではない。彼はその未来に対する或る期待、願望、恐怖、白昼夢をもっている」 (Lewin 1951=1956: 65)。

もの組織化し、合理的に前進していくという資本主義経済に適応した時間の意識構造を有していないがゆえに、階級が再生産され続けるのだと分析している。日本の貧困研究では、鎌田とし子が『「貧困の」社会学——労働者階級の状態——』において、貧困を過程として捉えるべきだと主張している。つまり、貧困とはある一時点における困窮状態のみをさすのではなく、それが継続することで、未来において人間の尊厳を奪われた状態になるという点も含めて論ずる必要があるのだと。

このように、貧困研究においては程度や扱い方の違いこそあれども、現在だけではなく未来も不可欠なテーマとして存在していることが読み取れるであろう。しかし、未来を貧困論の文脈とは切り離して、つまり、未来を付随物ではなく一つの主題として取り扱うことも可能ではないだろうか。例えば、時間それ自体を対象とした社会学的な研究としては、真木悠介の『時間の比較社会学』が存在する。真木は同書において、近代的な時間意識を成立せしめた社会的条件を論証するとともに、その時間意識の自明性の相対化を試みた。そして本書評の対象である若林の『未来の社会学』は、真木の知見を引き受けつつも、「未来」という観念に焦点を当てながら、人びとの時間意識がどのように構成されてきたのか、という点について論じた研究である。

本稿では、未来に関する若林の歴史社会学的な議論に基づきながらも、未来を、社会変動を捉えるための視点ではなく、現代を生きる我々の意識を読み解くための視点として位置付ける。具体的には、若林が本書において論じてきた未来を歴史・社会的な文脈から一旦切り離し、理念型として抽出する。その上で貧困論に立ち戻り、これらの未来論をいかにして応用することが可能かという点を考察する。

2 本書の内容紹介

本書は、各々の社会や時代で未来がどのように捉えられ、人びとがそこで何を見いだし、そうしたことが社会のどのようなあり方に支えられ、またそれによって社会がどのように編成されるのかという点について論じている。本書は全4章によって構成されており、以下、本節では各章ごと、順に検討する。

2.1 言語的・社会的制作物としての時間と未来

第一章「未来のありか、時間のありか」では、本書が時間と未来を論じる際の視点が説明される。日常的な感覚において、時間は人間の主観性に先立って存在していると思われるかもしれない。だが、社会学では「人間やその社会によって意味づけられたり、解釈されたりする主観的ないし共同主観的な時間」（本書：26）をその対象とする。例えば、昼夜という時間が主観性に先立って存在する客観的なものだと考えるのではなく、人がその暖かさや暗さに基づき世界を昼と夜という言葉によって対象化し、昼と夜に対し各々の時間にすべき／してはいけない活動を配分し、その配分に従って行動することで遂行的に産出された時間であると考え

ることも可能だ。このように言語を介して創られ、人びとの振る舞いを通じて遂行的に現実化し、規範的な制度になるような時間こそが社会学の対象である（本書：38-39）。

時間を言語的・社会的に創り出されたものだと考える限り、未来もまた同様の制作物となる。未来の事物は端緒的には、現在時において未来を想像する個々の人びとの意識の中にそのありかをもつ。そのような未来の事物が、新聞やニュース番組などで言説として表象され、未来的なデザインもつ自動車や万博の建築物³⁾を通じて物質的に表現されることで、社会意識において共有されるようになるのである（本書：53）。未来の事物がこのように遂行的に産出されるためには、社会が未来という観念をもつ必要がある。未来という時間は、未来の事物が存在するであろう空間として機能しているものであり、未来の観念をもたない社会では未来の事物もまた存在しえないのだ。従って、「未来のリアリティ」（本書：56）、つまりどのような未来が人びとにとって現実味をもちうるのかは、社会が未来という観念をどの程度、あるいはどのように有しているかによって異なるのである。

2.2 近代的未来の誕生

つづく第二章「時間の形と未来の来方」では、人びとが未来を、過去や現在との関係性の中でどのように理解し、どのように扱ってきたのかという点が論じられる。つまり「未来のリアリティ」の多様性が、歴史の温度が低い「冷たい社会」と高い「熱い社会」という軸⁴⁾を元に説明される。「冷たい社会」とは、現在時において生じる出来事が神話や歴史的過去に回収され、既知の出来事として解釈される社会である。そこには未知の出来事、つまり未来は事実上存在せず、過去と神話があらゆるものの解釈基準として存在し続けている。例えば、マオリ族はヨーロッパ人との初めての出会いですら神話の中で既にあった出来事として解釈するのであり、未知の出来事は存在しないという認識こそがリアリティを有するのだ。それに対し「熱い社会」とは、未知の出来事が生じることを認め、未来に直面した社会である。歴史の温度が上昇し始めた社会にある人びとは、不確定な未来をコントロールするために予言や呪術、あるいは歴史的教訓に頼ってきたのであった（本書：101-104）。歴史の温度がさらに上昇し、神話や過去に回収できない、あるいは歴史的教訓によって解釈できず、予言や呪術によってもコントロールできない未知の出来事が増大するにつれて、近代的な未来はようやくその姿を現し始めるのだ。

ところで一般に我々は、予言と予測は異なったものだと考える。例えば、予測は天気予報のように科学的な根拠に基いたものであるのに対し、予言とは占いのような無根拠なものであるのだと。しかし、両者を明確に区別すること困難である。例えば、プトレマイオスの占星術は天動説に基づきなされていたが、「天動説は経験的観察を整合的に説明しようとする理論体系」

3) 「万国博覧会という一九世紀の発明が、近代の世界において「万国＝世界」という空間を博覧するものだったと同時に、その世界がこれから進んでゆくであろう未来を展望する装置として発明され、存在してきたことは、すでに多くの論者たちによって繰り返し語られてきた」（本書：50）。

4) 若林はレヴィ＝ストロースの用語を用いながら説明しているが、あくまでもこれらの分類は理念的なものであり、純粋な「熱い社会」「冷たい社会」が存在するわけではない。

(本書：65)でもあり、人びとが「天体の運行と人間の世界の事象は照応関係をもち、天体の動きが世界の動きに影響を及ぼす」(本書：65)と信じている限り、占星術は科学的な根拠に基づく予言となる。だが一般に、予言において未来は人智を越えたもの(例えば神や宇宙の意思)によって決定⁵⁾され、予測において未来は過去と現在に連なる歴史的過程として創造される、と区別されている。そして実際にこの違いが、未来の未知度、未来のわからなさへと強い影響を与えてきたであろうことも推測できる。予測された未来は見通しを立てることが可能であるのに対し、予言による「未来は私たちが考えるよりもはるかに暗い霧に閉ざされた時間の地形の中にあり、超自然的な術によって変えるものだと考えられていた」(本書：83)のであり、人びとは予言や占いに期待と依存をしていたのだと。全く見通しがたたないからこそ、占いに頼ってでも未来を知りたいという欲求が生じたのであろう。そこからは、プトレマイオスの時代の人びとの未来と我々の考える未来とでは、見通しという点で極めて異なったリアリティを有していたこともわかる。

だが、これらの区別は現在を生きる我々が事後的になしたものである。プトレマイオスの時代の人々にとっての予言は、我々の時代における予測と同等物として機能していたであろうし、我々の時代における予測が「未来」において、予言であったと判断されたとしても不思議ではない。この点については、次々節にて補足する。

2.3 進歩的で主体的な未来とそのリアリティ

そして第三章「近代における未来」においては、近代的な時間のあり方とそれを支える社会的条件、中でも近代的時間に基づく未来の特異性についてが論じられる。若林は近代的時間の誕生を「神話的な時間の地形との決別」(本書：113)と表現しており、近代的時間とそれ以外の時間における未来には決定的な違いが存在すると説明する。その違いとは、進歩史観と未来に対する主体性である。近代的時間ではない時間において、過去と現在の生活様式の間大きな変化があったとは想定されていない⁶⁾(本書：135)。それに対し、近代的時間での歴史は「発展や進歩の記録や物語」(本書：135)として了解される。例えば、「石器から青銅器、鉄器の発明・使用を経て、近代の始まりの産業革命を生み出した近代的科学技術に至る」(本書：143)技術の発展の歴史として過去が位置づけられる。現在はその発展の歴史の現時点での到達点であり、過去から現在に至る歴史的過程を投影し予測したものとして、さらに発展した未来が構築されるのである。

このような近代的時間における未来は、人智をこえたものによってではなく、人びとによって主体的に構築されるので、「完全な未知ではなく、未明ではあっても一定の展望をもつもの」(本書：127)として存在するようになる。このような近代的時間は「ルネサンス以降の社会の文化的、宗教的、政治的、経済的、技術的な変動」(本書：160)によって社会が激変し、これ

5) ここでいう決定論とは、未来が人智を越えたなにかによって決定されているという意味であり、人びとが未来に全く関与できないという意味ではない。

6) 大きな変化がなかった思われていたからこそ、歴史が教訓として機能する。

までの歴史的教訓や知識によっては解釈できない出来事が生じたがゆえに発明されたと若林は説明する。例えば産業革命の進展に伴い、家を中心とした従来の労働から工場での賃労働へと変容し、宗教革命によって人びとは教会へと集うことなく信仰を実践することが可能となったように、新たな生活様式が次々と生み出され続けた。その新たな生活様式に対して、過去は教訓としての機能を失い、現在の変動は解釈できない不安そのものとして人びとの前に立ち現れる。人びとをその不安や「空虚から救い出し、主体化する意味論」（本書：162）として進歩の概念が、つまり近代的時間が発明された⁷⁾のであると。現在を進歩の過程であると了解することで、人びとは激変する社会の中での行動指針と心のやすらぎを獲得した。現在が未来の犠牲になるのではなく、耐えがたい現在を耐えるために未来があるのだ。

そして、そのような発明品である未来がリアリティを有していたのは、進歩が「現在進行中の現実として経験されていた」（本書：158）からである。進歩は地域によって不均等に進み、「『遅れた地域』と『進んだ地域』があり、『遅れた国家』と『進んだ国家』がいるものとして世界は理解される」（本書：148）。つまり、進歩の主体は国家であり⁸⁾、経済力や軍事力、文化や技術水準等を指標として、自国は他国と比べてより進んでいると、実際に比較することが可能であった。進歩的で主体的な未来は、同時代の他国との比較で実感可能であるがゆえに、リアリティを有していたのだ。

2.4 小さな未来への強迫

最後に第四章「未来の現在」では、現代社会は制度としては未来主義でありつつも、われわれは「もはや未来主義が時代遅れであると感じたり、かつてのように未来を確信できなかったりする社会を生きている」（本書：174）という議論が展開される。若林は「未来に基準を置き、現在の意味をその基準の元に了解しようとする」（本書：172）立場を未来主義とよんでいる。そして、制度としての未来とは、時間と歴史を不可逆的な時系列であると認識し、長期的な目標をもって計画を立て実行し、成長や進歩を現実化しようとするのが望ましいのだという価値観が、国家や国際機関に限らず、企業や教育機関、そして日常生活の領域でも支配的となっている状況を意味する（本書：175-177）。そのような未来のあり方が時代遅れであることは、進歩もまた神話であったと判明した⁹⁾ということである。

この点を説明するために、1980年代より、頻繁に取り沙汰されるようになった「持続可能な発展＝開発」¹⁰⁾という言葉を元に説明がなされる。それは、未来における発展を目指しつ

7) 「このような時間のあり方は、私たちは「近代」と呼ぶ社会の成立と共に一気に成立したのではなく、古代の都市文明で萌芽的に成立していたものが、近代化の過程で全面的に展開していったというのが、『時間の比較社会学』で真木悠介が描く近代的な時間の成り立ちである」（本書：131）。

8) 国家が進歩的な未来を担保していたということである。

9) カステルも、進歩によって社会問題が解決されるという理念は信仰であったと指摘している（Castel 1995=2012）。

10) 「持続可能な発展＝開発」とは、「一九八〇年に国際自然保護連合や国連環境計画がとりまとめた『世界保全戦略』のなかではじめて用いられ、その後多くの国際会議の宣言や計画に盛り込まれるようになった」（本書：194）考え方である。人口問題、環境汚染、宗教問題など多くの困難が露呈しは

も、近代的時間の特徴である進歩し続ける未来を暗黙の前提とするのではなく、成長や進歩には限界があるという理解の下で、できる限り発展を続けようという態度である。重要なのは、諸個人が進歩の終焉を信じているか否か、あるいは実際に我々は進歩してきたのかどうかという点ではない。進歩を前提としてきた国家や国際機関が、「持続可能な発展＝開発」へと方向転換したという点である。国家によって担保されてきた進歩的な未来はそのリアリティを失い、予測ではなく、予言＝神話になってしまったのだ。未来への過程として意味づけられていた現在、その根拠として意味づけられた過去もまた同時に失われ、「『ろくでもない現在』と『未来の先行きのなさ』が手元に残された」（本書：200）。向かうべき未来、現在を耐え忍ばせるための未来を社会が失った一方で、個々人は自己責任で選択しリスク¹¹⁾を引き受けるべきだという「小さな未来への強迫」（本書：221）にそれぞれ曝され、各人の責任において人生設計が求められている。若年世代は目指すべき方向さえ指示されないままに選択を強要され、それに伴うリスクを押しつけられてきた。それより上の世代の多くの人びとにとっても、雇用の流動化や年金問題などに代表されるように、「確実に思えた未来が不現実になり、そのなかで自分の将来が不安になる時代として経験されてきた」（本書：202）。

このような「小さな未来への強迫」を相対化し、そこから自由になるための、つまり別の未来のリアリティを構築するための一つ的手段として、「未来の社会学」という発想がここで提案される。未来という概念はそもそも社会的に構成されたものだという認識をもつことが、自己責任化を進展させる「小さな未来への強迫」への一つの対症療法となりうるのではないかと、若林は考えているのであろう。

3 本書の評価

3.1 未来というパースペクティブ

本書では、様々な社会における時間や未来のあり方が説明されつつも、現在の我々の時間意識と未来がどのように構築されてきたのか、という点が主題として論じられてきた。つまり、若林は時間や未来を歴史社会的に論ずる上での一つの基準や土台となるものを構築したと言える。

中でも、未来を空間的・視覚的なものとして位置づけ社会的に展開した¹²⁾という点は評価

∨、 じめ、成長の限界を意識せざるをえなくなったのだ。

11) 「リスク概念の下で、未来は現在の選択に従属し、現在の選択はその結果として予想される未来に従属する。そこでは現在と未来が循環しており、そのために現在と未来を関係づける時間の地形と風景は安定した像を結ばない、確率論的な可能性となる。未来に向かっているのはあの“窓”ではなく、現在の選択肢とそのリスクを示すマトリックスなのだ」（本書：211）。

12) しかしながら、未来を視覚的なものとして捉えるという点については、議論の余地がまだ存在するかのように思われる。確かに一般的な語用においても、未来は展望されるもの、あるいは明るい・暗いと形容されるのではあるが、視覚に障害を持つ人々が、どのように未来を表現するのかという点については検討する必要があるだろう。つまり、視覚的・空間的なものとは異なった未来の可能性がそこには存在するからだ。

すべきであろう。例えば、若林は未来を地図としてとらえる、あるいは地図から未来を読み取るという挑戦的な議論を展開する。15世紀のコロンブスの航海時における地図と、18世紀のクックの航海時における地図との間には、本質的な違いが存在するというのだ。つまり、コロンブスの地図には空白が存在しないのに対し、クックの地図には空白が存在する。地図に空白がないとは未知の世界＝未来が存在しないということであり、コロンブスの航海からは未来が既知化¹³⁾された世界を読み取ることができる。一方、地図に空白があるとは未来の存在を認めたという状態を示しており、クックの航海とはその空白＝未来にある種の期待を抱き、そこへと主体的に向かっていくことが推奨されるような社会がみてとれるのだ、と（本書：116-120）。

若林は地図の話を引き合いに出すことで、既知の未来といった理解に時間を要する概念にリアリティを与えたのであろう。また、未来を空間的に捉えるという点を字義どおりに説明すれば、それは未来を一定の拡がりを持ったパースペクティブとして捉えるということでもある。未来はただ単に、人々の意識内に想念として存在するだけではなく、「さまざまな出来事とその想念によって解釈され、人びとの行為がそれによって水路づけられ、それによって社会的な現実が生み出されるような創造的なもの」（本書：172）である。人々は未来との関係で現在を理解し、行動するのであり、どのような未来＝地図が社会的に構成されるかによって、その歩みも道も全く異なったものとなる。

未来と地図にはこのような二重の意味合いが込められており、『地図の想像力』の著者らしい発想であるといえるだろう。

もっとも、時間を空間的にとらえるという発想は、若林にオリジナルなものではない。例えば、精神科医の木村敏も哲学者のアンリ・ベルクソンの議論を下敷きにし、「空間化」された時間について論じている（木村 1982）。木村のいう空間化された時間とは、時間の流れに後と先の順序を定め、その時間に対し「眺める」などの空間的な表象に用いられる表現が使用されている状況を意味する。重要なのは、誰が最初に時間を空間的に表現したのか、という点ではなく、空間的に時間を捉えるという時間論によくある発想を、社会学の文脈に落とし込んだ、という点であり、この点こそを評価すべきなのだ。

3.2 現代日本のマクロ的未来

だが、本書第四章以降では、未来の社会学というよりも、「大きな物語」や「終わりなき日常」（宮台 1995）といった言葉で論じられる文脈において、現代日本社会のあり様が分析されているのも確かである。つまり、明るい未来を期待せずにいかにして生きるかという、少々紋切型な議論であると同時に、道徳的な提言となってしまうている。

また、第三章まで国民国家という枠組に限定されない未来論が展開されてきたのに対し、第四章では現代日本というローカルな文脈においてのみ有効であろう未来論が展開される。自己

13) 逆説的ではあるが、未来が既知化されるためには、未来が全くの未明・不可視であることもまた必要である。

責任論やリスク社会論は、確かに全世界的な現象ではある。だが、欧米諸国においてそれらの現象が確認され始めたのは、つまり、個人化という現象が認識され始めたのは1980年代ではない。日本では、戦後の経済成長により、自己責任や個人のリスクといった問題が顕在化することないままに、1980年代の「持続可能な発展」への方向転換、そして1990年代のバブル崩壊を経て、初めてそれらの問題が社会に顕現しはじめることになる。1980年代以降に突如としてこれらの現象に巻き込まれた日本と、そうではない欧米諸国とでは、たとえ同じ現象の渦中であろうとも、その受け取られ方・対応のされ方は当然異なったものとなる。例えば、これまでのような経済成長が見込めない場合にあって、いかにして国民の幸福を実現するかという政策を重視する国家と、生活の最低ラインをどこに定めるのかという政策を重視する国家とでは、その国家に生きる成員の抱く未来展望も異なってくるであろう。

つまり、本書において問題視される「小さな未来への強迫」は、確かに日本社会の一面を捉えてはいるが、これを世界的な事象であるかのように表現してしまっている点には注意が必要である。筆者にその意図がなかったとしても、第四章の「未来の現在」という章題、第四章2節の「現在における未来」という節題、またロスジェネやウルリッヒ・ベックの議論が参照されることも相まって、それらの誤解を招くには十分である。そして、その日本社会の未来の分析も、従来の議論の文脈を越えるものではなかった。あくまでも現代日本における未来を論じているのだ、という意識を持つと同時に、その未来と人々が実際にはどのように影響及ぼしあいながら存在しているのか、という視点を持つことで、未来の社会学の更なる発展が可能となるのではないだろうか。

そして、若林が第三章までに検討されてきた未来と人々のあり方は、未来の社会学と名指すに十分な論考であったと思われる。そこで次章では、本書から得られたそれらの知見が、未来論及び貧困論に新たな意味を付与する可能性について検討する。

4 未来の理念型と貧困の社会学

若林は本書で社会における未来の歴史的な変遷を論じてきた。その変遷¹⁴⁾をシンプルに図示すれば、〈不在の未来〉、〈既知性に回収される未来〉、〈進歩的で主体的な未来〉、そして〈小さな強迫としての未来〉、というものになる。本章では、若林の議論から上記の未来の理念型を抽出し、それらが、現代を生きる我々の未来のあり方の分析、そして未来論を内在する貧困論にも応用できるのではないかと、という点を検討する。

従って、ここではまず4つの未来の理念型について説明する。〈不在の未来〉とは、「お先がまっくらだ」という話ではなく、時間が過去－現在－未来という空間的な膨らみをほとんどもたない状態である。典型的にはピグミー族がこれにあたる。彼らは自分の背丈以上の木々に囲まれた森林の中で生活しており、そこでは遠く見通すということが物理的に不可能である。故

14) もっとも、必ずこの順序で未来は変遷するというわけではなく、そして、これらの未来が同一時間に併存するということもある。

に、「遠く」を意味する言葉持たない彼らは、遠い未来といったことを考えることができないのだと説明される（本書：90-91）。ここで注目すべきは、生活空間と未来展望が密接に関係しているという点であろう。〈既知性に回収される未来〉とは、未知であるはずの出来事が、あたかも既知であったかのように経験される状態である。典型的には、マオリ族の神話による未来の解釈や古代ローマ人の占星術があげられる。そして、〈進歩的で主体的な未来〉とは、近代的な未来を意味する。最後の〈小さな強迫としての未来〉は、個人が自らの責任で未来を構築しなければならない状態であった。

では、このように便宜上四類型した未来を、我々はいかにして貧困論に活かすことができるであろうか。ここで一度、貧困論における未来論の典型を確認しておこう。未来と貧困という視点を有する研究として冒頭でも少しふれたブルデューは、アルジェリアの下層プロレタリアを「未来をもたぬ人々」（Bourdieu 1977=1993：121）と表現する。この言葉が意味するのは、彼らが観念としての未来を有していないという話ではなく、彼らにはすべてが実現可能な夢想の未来¹⁵⁾しかないので、未来を予測して現在の行動を選択するという合理性が欠如しているということである。未来を持つためには安定した生活基盤が必用であり、まずは生存のための経済的必要性から解放される必要があるのだと説明される。つまり、現在の困窮が未来展望に影響を与えている、ということだ。

仮に「未来をもたぬ人々」を、先ほどの四類型に当てはめるとすれば、〈既知性に回収される未来〉であろうか。なぜなら、彼らは、自分達の子供を医者や弁護士に育てられる¹⁶⁾と信じており、それが達成されないとすれば、それは何らかの悪い力が働いたからだと決まって解釈するからである。あるいは、〈進歩的で主体的な未来〉であろうか。自分たちはもうダメだとしても子供たちを良い職業に就かせることはできる、と考えているのであれば、それは〈進歩的で主体的な未来〉である。

しかし、本章では上記のような一般的な思考とは逆に、彼らは〈小さな強迫としての未来〉に曝されているはずだ、という断定の元に考察する方法を提案したい。なぜなら、「彼らは自らの責任で未来を構築しなければならない。しかし、人間は一人で未来を構築し保有できるほど強くはない。ゆえに、夢想の未来を描かざるをえないのだ」と、論ずることも十分に可能であるからだ。このように考えることで、アルジェリアの下層プロレタリアと同じ対象を論じつつも、「現在の困窮が未来展望に影響を与える」という従来の枠組から一旦離れ、「国家が未来を担保しないという社会的状況が個人の未来展望に影響を与える」という枠組を持つことが可能となる。つまり、彼らのおかれた経済状態を論じる以前に、彼らの未来展望は国家の政策によって一定の影響を受けているのではないか、という仮説の構成が可能となった。

このように未来の理念型を一度構成することで、対象を理念型に当てはめ、そこからのズレによって検証するという方法をとることが出来る。この方法は上記のような集合的な未来に限

15) 「非現実的で常軌を逸した願望」（Bourdieu 1977=1993：117）。

16) 子供を医者が弁護士にするという話は、ブルデューがあげる下層プロレタリアの抱きがちな夢想の未来の例である。

らず、個人の語る未来の考察にあたって用いることができる。若林の議論から抽出した理念型に留まり続けるのではなく、個人的・集合的未来の調査を継続し、常に未来の理念型を構成し続ける必要があるのだ。

5 おわりに

本稿では、貧困論とは別の文脈で未来を社会的に研究することがいかにして可能か、そして、そこで得られた未来の社会学という知見が、貧困論にどのような貢献をもたらしうるか、という点を検討してきた。つまり、現時の困窮状態が未来展望に影響を与えるのだ、という貧困論における未来論とは異なる未来論の可能性を、若林の『未来の社会学』の限界と効用を明らかにすることを通じて、検討してきた。その結果、我々は若林の未来論から四つの未来の理念型を抽出し、対象と理念型のズレから未来のあり方を考察するという方法を提案した。そしてブルデューが「未来をもたぬ人々」と称した事例であっても、「現時の困窮状態が未来展望に影響を与える」という枠組を外れて考察が可能であるということをしめした。

確かに国家はもはや進歩的な未来を担保しなくなったのかもしれない。しかし、各々の国家における人権などの理念の取り扱われ方、そしてそれに基づく政策を通じ、依然として国家は国民の未来展望のあり様に強い影響を与えている。ある人が置かれている経済状態だけではなく、国家の政策によっても、我々の未来展望は大きく左右されるのだ。

冒頭の貧困 JK の話に立ち戻って考えてみよう。彼女は自身が貧困であるがゆえに、進学という夢、未来を諦めなければならない、と語ったのであった。一見すると、典型的「現時の困窮状態が未来展望に影響を与える」図式に当てはまりそうではある。しかし、貧困であるからといって、必ずしも進学を諦めなければならないというわけではないはずだ。例えば、ヨーロッパの大学の学費は平均して低く、学費が無料という状況も少なくない。これらの国家においては、貧困が進学の断念に直接的に繋がるとは安易には考えられない。それどころか、「貧困であるからこそ、大学に通わせろ」という未来を見据えた声があがったとしても不思議ではない。貧困にある本人が、貧困と進学を地続きで考えてしまうという状況こそを、まずは問い直すべきなのかもしれない。つまり、未来と我々をつなぐ新たな論理が求められているのであり、その論理こそが本研究が到達すべき地点であると言えるであろう。

【参考文献】

- Bourdieu, Pierre, 1977, *Algérie 60: Structures économiques et structures temporelles*, Paris: Les Éditions de Minuit. (= 1993, 原山徹訳『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』藤原書店.)
- Castel, Robert, 1995, *Les métamorphoses de la question sociale: une chronique du salariat*, Paris: Fayard. (= 2012, 前川真行訳『社会問題の変容——賃金労働の年代記』ナカニシヤ出版.)
- 玄田有史, 2001, 『仕事のなかの曖昧な不安——揺れる若者の現在』中央公論新社.
- 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智, 2006, 『「ニート」って言うな!』光文社新書.
- 鎌田とし子, 2011, 『「貧困」の社会学』御茶の水書房.

- 木村敏, 1982, 『時間と自己』 中公新書.
- Lewin, Kurt, 1951, *Field Theory in Social Science: SELECTED THEORETICAL PAPERS*, New York: Harper and Brothers (= 1956, 猪俣佐登留訳『社会科学における場の理論』 誠信書房.)
- Lewis, Oscar, 1959, *Five Families: Mexican Case Studies in the Culture of Poverty*, Basic Books. (= 1970, 高山智博訳『貧困の文化——五つの家族』 新潮社.)
- 真木悠介, 1981, 『時間の比較社会学』 岩波書店.
- 見田宗介, 2012, 『定本見田宗介著作集Ⅶ——未来展望の社会学』 岩波書店.
- 宮台真司, 1995, 『終わりなき日常を生きろ』 筑摩書房.
- 若林幹夫, 1995, 『地図の想像力』 講談社.
- , 2003, 『未来都市は今——「都市」という実験』 廣済堂出版.
- 山田昌弘, 2004, 『希望格差社会——「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』 筑摩書房.
- , 2013, 『なぜ日本は若者に冷酷なのか——そして下降移動社会が到来する』 東洋経済新報社.